

「原書で読む『Narrative Inquiry』を、始めます！！

時: 20210515 10:00

所: 武庫川女子大上田研究室

テキスト: 「Narrative Inquiry Experience and Story in Qualitative Research」

(D. Jean Clandinin F. Michael Connelly Jossey-Bass 2004)



これは、今年度(2021年)武庫川臨床教育学会で始められる三つの研究会、その3の『人間の発達・成長・回復ナラティブ研究グループ』の活動を具体化したものです。

『ナラティブ』あるいは『語り』、「ナラティブ的アプローチ」といった言葉が最近よく用いられるようになってきました。そうした例のひとつとして、日野原重明さんの新聞記事を紹介したいと思います。

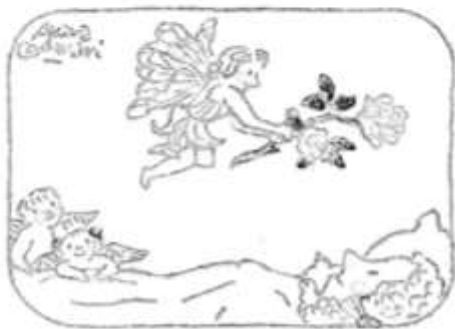
「ナラティブ＝語り」の医療

日野原重明

「ナラティブ・メディスン」という言葉をお聞きになったことがありますか。私が理事長を務める財団ライフ・プランニング・センターでは今夏、「ナラティブ・メディスン」の第一人者で、米国コロンビア大学医学部の臨床教授のリタ・シャロン先生を招いてワークショップを開催しました。「ナラティブ」とは「物語、語り」といった意味で、「ナラティブ・メディス

ン」は、医療者が患者の語る言葉にどれだけ深く共感できるかを重視し、そのことで医療を上質なものに変えていくという考え方で、シャロン先生は夏目漱石の「こころ」、長谷川等伯の風絵、プリューゲルやレンブラントの絵画、ガーシュインの音楽などさまざまなアートを素材に、参加者と一緒に「配慮し注目する」といった作業を解説していきまし

人形遊びをしている絵です。シャネットは実在の少女で、彼女の母親の手記によれば、オスラーは甲高い声と奇妙な言葉



絵と題字・小田桐樹

遣いで、花のこや鳥のこを結し、病室をおとぎの国にしてしまい、その合間に小さな患者である少女の病状から心の内まで観察したそうです。少女の死が迫っていた11月の寒い朝には、オスラーはバラの花を一本挿んで、その花がどんなに少女に会いに行きたいと言ったかを話して聞かせました。その夜、少女は、妖精でも人間でも、その頬の上にいづまでも「赤いバラ」の色を保っておくことはできない、いつかは枯れてしまおう、ということを信じたのです。以上は拙著「医の道を求めて」ウィリアム・オスラー博士の生涯に学ぶ(1993年)でも紹介しています。100年も前の医師が、人形やバラの花を手を、両色までも演じて、少女の心に寄り添っていたのです。なお、愛する一人息子が第一次世界大戦で戦死し、失意の中にあったオスラーも、シャネットを見送った1年1カ月後、70歳で世を去ったのです。

(絵: 長谷川等伯「風絵」)

『105歳、私の証 あるがままに行く』

「『ナラティブ＝語り』の医療」

朝日新聞 20161022

…「ナラティブ」とは、「物語り、語り」といった意味で、「ナラティブ・メディスン」は医療者が患者の語る言葉にどれだけ深く共感できるかを重視し、そのことで医療を上質なものに変えてゆくという考え方です。

……このように、述べられていますが、この文の、「医療」を教育に、「患者」を生徒へ、と書き変えてみると、学校現場の姿(風景)が浮かびあがってくるように思います。

私たちの現場、臨床の場の中で、『ナラティブ』(「ナラティブ的」)であるということは、どのようなことを指すのでしょうか? またそれは、どんな意味を持っているのでしょうか? また、『ナラティブ』はどのような流れの中で生まれ、発展してきたのでしょうか。そんな問いが浮かびます。テキスト“Narrative Inquiry”は、そんな問いに、一つの答えを与えてくれようと思います。

著者の一人クランディニン(D. Jean Clandinin)はカナダ・アルバータ大学で教員養成をされてこられました。その実践の例を、『子どもと教師が紡ぐ多様なアイデンティティ カナダの小学生が語るナラティブな世界』(田中昌弥 明石書店 2011)で見ることができます。その本には、「執筆者紹介(P.7)」として、次のように記されています。

・・・ジーン・克蘭ディニンは、長い間、学校の実践家たちと共に研究し、学びながら、20年間にわたってナラティブ的探究(narrative inquiry)を続けてきた。本書はその成果を発展させつつ、個人的実践知、専門知の風景、支えとするストーリーについてナラティブ的に構築された理論的背景を用いることで、学校における様々な人生を理解するための言葉とストーリー化された枠組みとを提示する。

短くまとめると、「実践家たちと共に研究し、学び、20年間にわたりナラティブ的探究(narrative inquiry)を続けてきた人で、この本はその成果をさらに発展させながら、ナラティブ的に構築された理論的背景を使って、学校での様々な人生を理解するための言葉とストーリー化された枠組みを示しているものである」。... そんな風に、紹介をしています。

このように紹介されている『ナラティブ的探究(narrative inquiry)』——、「実践家たちと共に研究し、学びながら、20年間にわたって続けられた『ナラティブ的探究(narrative inquiry)』。それを、講読テキストとして読み合い、並行して、私たちが置かれている現場のしんどさ・課題、面白さをも交流し合いながら、じっくりと、その言葉の意味や理論を学び合、一緒に味わってゆきたいと思っています。

「担当者」による和訳に沿って進める予定ですが、『英語(カナダ語?)』に不慣れな方も多いただろうし、その訳も不十分になることもあるかとも思います。日本語に訳して読むのが苦手な方は、「担当者訳」に目を通し、その訳の不十分さを指摘してもらって学んでいくこともあって良いかなとも思います。

『ナラティブ的探究(narrative inquiry)』がどういうものであり、どんなことを目指しているのか。そんな事を学び合いながら、どんなふうに消化し、吸収し、身につけて実践に生かしてしていけば良いのか。そんなことを、一緒に考えてゆく機会になればと、思っています。気軽に、ご参加ください。

① 第一回、5月15日 10:00

② テキスト。『Narrative Inquiry: Experience and Story in Qualitative Research』

(D. Jean Clandinin F. Michael Connelly Jossey-Bass 2004)

フロッグ” (和訳は、当日お渡しする予定です)を中心に、今後の持ち方・要望も含め話し合い、語り合いたいと思います。

***フロッグ** (原文) を、上田先生が PDF にしてくださいましたので、それも添付して送りたいと思っています。今回はそれを利用していただいてもいいかな、と思っています。

いろいろ準備してくださって、上田先生に感謝です。

石井。20210505